

# 三朝温泉かわら版



## 三朝温泉の登録有形文化財

三朝町には国宝に指定され世界遺産登録を目指す三徳山投入堂を始め、国の無形民俗文化財に認定された大綱引き『じんしよ』等多くの文化財がありますが、温泉街にもいくつかの登録有形文化財の建物や有名建築家が関わった作品があります。今号ではそれらの登録有形文化財と三朝にゆかりの建築家作庭家を紹介いたします。

### 其の二 旅館大橋



旅館大橋は、長さ100メートルを超える豪壮な木造3階建ての旅館で、昭和6年に着工され、2年の歳月をかけて同8年に完成しました。

### 其の三 木屋旅館



唐破風の車寄せを持ち、部屋ごとに意匠も木材に変えられ、凝った造りの数寄屋風の建物で、昭和初期の大規模な和風旅館として貴重な文化遺産となっています。

### 其の四 萬寿山 南苑寺



南苑寺は臨済宗相国寺の寺院で、昭和2年建築の山門、本堂、隠窟、食堂などが良好な状態で残っています。



### ★ 樋口浩己

(1895~1984)

現・京都工芸繊維大学や、現・京都大学建築科を創設し、多くの後進を育成すると共に、現・神戸大学工学部の設立や法隆寺、平等院の修復にもかかわりました。

三朝温泉では、三朝大橋と共に旅館旧万翠楼を設計し、望楼と唐破風の車寄せを持つ旅館と橋を一体化させ、三朝温泉の象徴となる景観を創出しました。(尚、現万翠楼には、人間国宝の宮大工、魚津弘吉が作った茶室、無声庵が残されています)

に、ヨーロッパで生まれた建築運動に共鳴し、分離派建築会を結成します。後に日本の数寄屋造りに美を見出し、伝統文化とモダンフォーム建築の統合を図った建築で知られています。

それまで建築として評価されなかった茶室を建築として見つけ、論文「利休の庭」では北村透谷賞を受賞するなど茶室と数寄屋の研究論文や多くの建築作品を残しました。

三朝温泉では、旅館後築を設計し、旧家より譲り受けた長屋門や、柱、梁を再構成して、豪壮なロビーや茶室様式の客室を造りました。



### ★ 重森完途

(1896~1975)

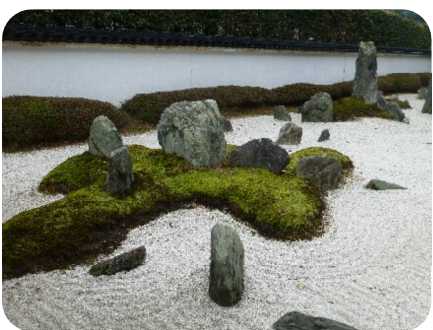


東大大学院で近代建築史を学ぶと共に

日本美術学校で日本画を学びますが挫折し、京都へ移ると、生け花の革新運動を勅使河原倉風らと共に始めます。後に日本庭園を独学で研究し、昭和11年より全国の日本庭園を調査、日本庭園の研究家として大きな功績を残すと共に、国内に200もの庭園を作庭しました。作庭された庭は、力強い石組みとモダンな苔の地割りで構成された枯山水が特徴で、三朝では解体された永楽庵の庭を設計しています。



在りし日の永楽庵の石庭



三朝館に残る、重森完途氏の手掛けた石庭

(三朝館には、息子の重森完途氏が手掛けた石庭が残されています)

山門は明様式の袴門で、異国情緒を醸し出し、本堂は入母屋平入の一部二階建ての数寄屋建築で隠窟と共に貴重な樹種を適材適所に用いています。明取窓も丸窓にするなど、意匠も趣向を凝らし、本堂屋根の鬼瓦も見る角度によって表情が一変するなど、当時の瓦職人の遊び心を感じさせます。



↑正面から見た鬼瓦 柔らかな表情で見守っている？

↓横から見た鬼瓦 読みをきかせている

### 其の五 三朝橋



完成直後(昭和9年頃)の三朝橋

三朝橋は橋長68.6m、有効幅員5.5mの鉄筋コンクリート木橋型連続街橋で、京都大学建築科の創設者である武田五一の設計により、昭和9年に完成されました。

コンクリート構造でありながら、橋脚や青御影石による親柱、高欄、春日燈籠など木橋風の丁寧なデザインがされており和と洋の融合の意匠を得意とした武田五一の特徴が表れています。

また、大鼓橋風の緩やかなスロープのシルエットは温泉街の風情に欠かせないものとなっています。

### ★ 武田五一

(1892~1938)

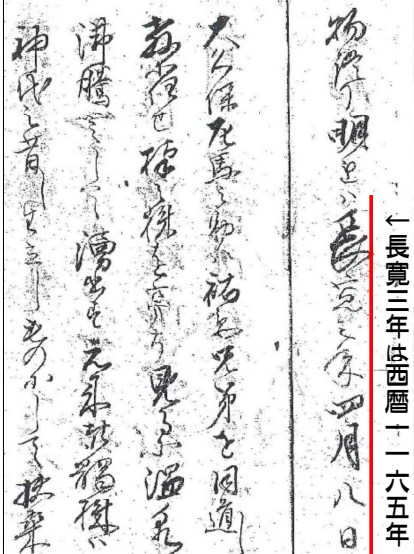


武田五一は「関西建築界の父」と呼ばれる建築家で日本の近代建築を代表する一人です。

ヨーロッパ留学の後、アルヌート・セセッション等を我が国へ紹介し、建築以外にも、工芸や画家も手掛けしました。

## 三朝温泉 歴史コーナー

三朝温泉歴史コーナーでは三朝温泉の開湯由来について記載の資料について紹介いたします。



↑長寛三年は西暦十一六五年 明治十四年写本 三朝温泉鑑編概略より



此の兩所を穿ち諸人の病苦を救へかしと致し置き失せにけり左馬之助夢覺め不思議なる事哉と夢みし次第を祐兵衛に物語りたり明くれば長寛三年四月八日大久保左馬之助は祐兵衛兄弟同道し致に任せ橋の株を穿ち見たるに温泉湧出す然るに此度妙見大菩薩の御授け誠に有り難き事なりと早速抜谷の奥に祠を立て山の絶頂に講して信心怠りなかりしか今に備へ神蹟のみ残れり罪物橋株がより湧出したるを株湯とぞけて今に耕地の邊にあり夫より退々繁昌して今や戸々に温泉在りと雖も數百年の星霜を経し事なれば次第順序判然ならねど何れも神佛の御授にして有難き事ごもなり。

大正五年発行 伯耆三朝温泉誌より



伯耆三朝温泉誌の表紙

これらは、間もなく開湯850年を迎える三朝温泉の由来について書かれた、数少ない資料であり、今後も残していかなければならない貴重な物となっています。